

## 媪ヶ堰〈うばがせき〉（誉田町片吹）

「いろいろせわになった。もっと、いてもらいたいが、乳母〈うば〉のたつての願いならしかたがない。いままでせわになった礼になんでもほしいものをとらそう。」

乳母を前に、お殿様がいました。

「ありがとうございます。わたしのような百姓女が、お城においていただいただけでも、もったいないでございます。お礼なんて…」

と、乳母はことわりました。しかし、お殿様の「えんりよせずにいえ。」とのおことばに、乳母は「ひとつお願いがございます。」と、自分の生まれた村の話をはじめました。

「わたしの村は、とても貧しい村でございます。それといたしますのも、水にふじゅうしているからでございます。そのため、米もじゅうぶんに作れず、百姓は、畑作や綿を作ってくらしておるのでございます。そのため、農閑期になると、男は、出かせぎや、わずかばかりの日やといに出てくらしを立てております。

水は、全然ないというのではございません。わたしの村へ引かれている、浦上ゆは、川下であるため、米を作るにじゅうぶんな水がこないのでございます。しかし、その北を流れている岩見ゆは、水が豊かで、どんな日照りにも、水がかれたことはございません。

そこで、おねがいと申しますのは、その岩見ゆに、ほんの少しの穴をあけさせて頂きたいのでございます。そうすれば、わたしの村は、水もじゅうぶんとなり、米も作れ、村の者もどんなによろこびますことか。」

と、涙ながらに話す乳母の心にお殿様は心を動かされ、すぐさま、その願いを聞きとどけました。

自分のことはさておき、村のために申し出た乳母の心音〈こころね〉に、お殿様は、ひどくおよろこびになったということです。

それから、乳母の村は、のちのちまで豊かにくらすたとのことです。のちの人は、この乳母のこうせきをたたえ、「姥〈うば〉の碑〈ひ〉」を建て、毎年、田植時（七月上旬）には、感謝をこめて、この碑の前で回向〈えこう〉をたむけるということです。

また、悪意をもって、この堰〈せき〉をさわると、たたりがあるということです。